

夏目漱石

文壇のこのごろ



# 文壇のこころ



ある雨の日の朝、早稲田に夏目さんをお訪ねした。いつ  
 ものように門が閉しまっているので、傍かたわらの潜くぐりを入はいってさらに  
 壁の落ちた玄関先に立つ。蔦つたが右手の柱に絡からみついて繁しげっ  
 ている。格子戸を開けようとしたが開かないので、呼鈴よびりんの  
 電鈕ボタンを捜すと蔦の葉の影に隠れている。電鈕が人に見付けら  
 れるのを恐れているようである。門が閉とざされて、玄関の格  
 子戸が閉って、そうして呼鈴の電鈕まで人の目を逃のがれよう  
 としている。この家の主人がいつか私に向って「懐手ふところして  
 世の中を小さく暮したい」と言った言葉を、私はその時思い

出していた。

電鈕を押すのを少し気の毒に思いながら、私は蜘蛛の巣の  
ように腐食し切った霧除けの雨樋あまどいの水の穴から、雨水がど  
うく落ちて来るのを見ていると、一人の女中が出て来た。

そうして戸を開けずに格子の間から私の名刺を受取った。

まもなく私はその格子戸の中に入ることを許された。煤すす

けた畳に天井から雨でも漏るのか、雑巾ぞうきんを入れた瀬戸引せとひきの

金盥かなだらひの置いてあった脇わきに外套コートを脱いで、私は書齋に通った。

文壇にあらわれる諸家の作物は、つとめて読むようにしているが、このごろ読んだものの中に、徳田秋声氏の「あらくれ」がある。「あらくれ」はどこをつかまえても嘘うそらしくない。この嘘らしくないのは、この人の作物を通じての特色だろうと思うが、世の中は苦しいとか、穢けがらわしいとか——穢わしいでは当たらないかもしれない。女学生などの用いる言葉に、「随分ね」と言うのがある。私はその言葉をこゝに借用するが、つまり世の中は随分なものだというような意味で、どこからどこまで嘘がな

い。

○もつとも他の意味で「まこと」の書いてあるのとは違  
う。したがって読んでしまうと、「御尤ごもつともです」という  
ような言葉はすぐ出るが「お蔭様かげさまで」という言葉は出な  
い。「お蔭様で」という言葉は普通「お蔭様で有りがと  
うございました」とか、「お蔭様で利益を得ました」と  
か、「お蔭様で面白うございました」とか言う場合に多  
く用いられるようである。私のこゝで言う「お蔭様で」  
もやはり同じような意味であることは、断るまでもない  
であろう。



○どうも徳田氏の作物を読むと、いつも現実味はこれかと思わせられるが、たゞそれだけで、ありがたみ有難味が出ない。読んだあとで、感激を受けるとか、高尚な向上の道に向むかわせられるとか、何かある慰謝を与えられるとか、悲しい中に一種のレリーフを感じるとか、たゞの圧迫でなく、圧迫に対する反動を感じるとか、悲しみに対する喜びというような心持を得させられない。「人生とはなるほどこんなだろうと思います。あなたはよく人生を観察して、描写し尽しましたね。その点においてあなたの物は極度までいつている。これよりさきに、誰が書いても

書くことはできませんまい。「こうは言えるが、しかしたゞ  
「御尤もです」で止とまっていて、それ以上に踏み出さない。  
○まして、人生がはたしてそこに尽きているだろうか、  
という疑いが起る。読んでみると、一応は尽きているよ  
うに思われながら、どうもそれだけでは済まないような  
気もする。こゝに一つの不満がある。徳田氏のように、  
嘘一点もないように書いていても、どこかに物足りない  
ところが出てくるのは、このためである。

○他の諸家——徳田氏ほど深く人生を見ていない人々の  
ほうに、かえって徳田氏の作物の中に見出みしえいだないほど

の満足をもつて、徳田氏以上の感動を読者に与えるものがあるように思われる。

○つまり徳田氏の作物は現実そのまゝを書いているが、その裏にフィロソフィーがない。もつとも現実そのものがフィロソフィーなら、それまでであるが、目の前に見せられた材料を圧搾する時は、こういうフィロソフィーになるといふような点は認めることができぬ。フィロソフィーがあるとしても、それはきわめて散漫である。しかし私は、フィロソフィーがなければ小説ではないといふのではない。また徳田氏自身はそういうフィロソフィー

ーを嫌っているのかもしれないが、そういうアイデアが氏の作物には欠けていることは事実である。初めからあるアイデアがあつて、それに当て<sup>は</sup>筋めてゆくような書き方では、不自然の物となろうが、事実そのままを書いて、それがあつたアイデアに自然に帰着してゆくというようなものが、いわゆる深さのある作物であると考えられる。徳田氏にはこれがない。

○徳田氏の作物が、「あらくれ」のみにはかぎらぬが、どうも書きっぱなしのように思われるのは、このためであらう。その点にゆくと、武者小路氏などのほうが、意

味のあるものを書いている。武者小路氏は若い人で、世間に対しては知識も乏しいし、自然に書けば狭い範囲より出ないし、ひろ拡げれば不自然になるかもしれないが、しかし徳田氏に見ることのできぬような、ある意味を書いている。もっともそれは手際てぎわの問題ではない。作風の問題である。

○手際から言えば、徳田氏の作物は、真面目まじめで、おちつき落着があつて、無駄がなくて、老練である。どんな物を書いても出来損いが無い。しかし徳田氏に類似した作風の人は今この文壇に珍らしくはない。

○志賀直哉氏の「茫ほんの犯罪」は他の人には書けぬものである。さきごろ東京朝日に小説を頼んだ時、五十回ばかり書いてよこしてくれたが、自分はどうしても主観と客観のあいだに立って迷っている。どちらかに突き抜けなければ書けなくなったと言って、止やめてしまった。徳義上は別として、芸術上には忠実である。自信のある作物でなければ公にしないという信念があるためであろう。その点にゆくと長田幹彦氏などは、すこぶる達筆家である。三宅雪嶺博士がこのごろよく演説の頼み手があると、どこへでもすぐ出掛でけて行って演説する。長田氏の精力

的な点も、ちやうど雪嶺博士と同じようなものである。

○有島生馬氏は特色のある作家である。「蝙蝠こうもりの如く」などは私の愛読した一つである。この作などは、だれでも書けるといふような種類の物ではない。有島氏でなくてはできぬ物である。

○太陽に出た北村清六と名乗る人の「少年の死」も、やはり特色のあるもので、ありふれたものではない。今日まで始終繰り返されてきたような種類の物ではない。しかし作物の価値としては、特に取り立てて賞賛するほどのものだとは思わない。

○森鷗外氏のこのごろの作物、たとえば「栗山大膳」くりやまだいぜんとか「堺事件」とかいうような、昔の歴史を取扱った物を、世間では高等講談などと言って悪く言うが、私は面白いものだと思える。物その物が面白いのみならず、目先めさきが替っているだけでも面白い。高等講談などと言って、一笑に付すべきものではない。もつとも高等の文字が付いているから、必ずしも冷笑の意味ではないと言うなら、それでもよい。

(大正四・一〇・一一「大阪朝日新聞」)







日本文学電子図書館

---

文壇のこのごろ

著 者 夏目漱石

作成者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集」第11巻」 角川書店

昭和42年7月30日 7版

---

日本文学電子図書館